

「八戸の文化伝える窓口に」

中国・文化交流団体が来八



八戸との交流推進に意欲を示す「北京若観国際文化交流センター」の視察団一行＝29日、デーリー東北新聞社

中国・北京市の文化交流団体「北京若観国際文化交流センター」の視察団が27日から30日までの日程で八戸を訪れ、民間レベルでの交流の可能性を探っていた。

同センター長の潘飛さんは29日、取材に「八戸を訪れた縁を大切にし、つながりを一歩ずつ深めていきたい」と今後について語った。

今回の来八は、同センターで首席執行官を務める上代明さんが、学校法人光星学院(八戸市)の法官新理事長の教え子だったことなどがきっかけ。同日、7人が同市のデーリー東北新聞社を訪れ、荒瀬潔社長と懇談した。

潘さんは、八戸について「工業都市というだけでなく、漁業も非常に発展している。八戸の文化を伝える窓口になりたい」と感想を述べた。

光星高(当時)出身の上代さんは「八戸は第二のふるさとなので、恩返ししたい」と思いを語った。法官理事長は「彼ら(同センター一行)の思いに心えたい」と中国との交流を深める考えを強調した。

(福田駿)